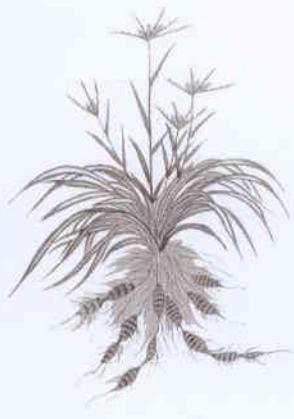


【生薬名】香附子 *CYPERI RHIZOMA*

【起源植物】ハマスゲ *Cyperus rotundus*

【科名】カヤツリグサ科 *Cyperaceae*



【別名】沙草(地上部)『名医別録』、古くは雀頭香

【薬用部分】根茎

【主成分】精油（セスキテルペンのシペレン、シペロール、モノテルペンの1- α -ピネン、シネオール）、脂肪酸

【薬性】気味は辛微苦平、帰経は肝三焦に属す

【効能】●中医学では行気薬(理気薬)に分類される

●理気解鬱、調経止痛を目的に利用されている

●李時珍は本草綱目で香附子は十二経八脈の気分に行ると記載

●『和剂局方』では「常に服すれば胃を開き、痰を消し、雍を散じ、食を進める。朝早く旅立つとき、登山の際には就中これを服するが良い。邪を去り、瘴を避ける。」とある

●花期の地上部は煎じて飲むと、気鬱を散じ、胸膈を利し、痰熱を降ろすという

●魚による蕁麻疹には特効薬として使い、長服すればその体質改善薬として使う

【出典】●香附子 味甘、気を快くし、鬱を開き、痛みを止め経を調え、更に宿食を消す。(薬性歌)

【備考】●古人は香附子を『氣病の総司・女科の主帥』であるといい、広く気滞による疼痛、特に月経痛や月経不順に用いている

●香蘇散は胃腸弱の初期の感冒、気鬱症や生理痛などに用いる

【処方例】●香蘇散、五積散、川芎茶調散、竹筴温胆湯、二朮湯、女神散